

明日香村飛鳥川上流地域における 自然文化誌研究

奈良県香芝市立真美ヶ丘東小学校
奈良自然文化誌研究会
本庄 眞

1. はじめに

環境教育とは何だろう。私は次のように考えている。

- ①環境教育とは、ヒトという種の生存に関わる教育である。
- ②環境教育は、文明や文化のありかたを問い直す教育である。
- ③環境教育は、生き方を問い直す教育である。

このように見たとき、近代化・文明化によって失われた精神文化や思想、先人の知恵を今一度冷静にふりかえり、種々な面から、できる限り科学的に吟味を加えていくことは重要なことであると考える（特に②の視点にたつて）。

明日香村飛鳥川上流地域における「自然と人間のかかわり」を研究対象とし、歴史的・時間軸を入れながら、自然科学・人文科学・社会科学など既存の専門分野を越えた総合的なアプローチを3年前より試みている。自然文化誌（「自然文化誌」をとりあえず、「自然と人間の関わりにおいて作り出された様々な現象」と定義する）の研究方向や研究方法は、「総合的な学習」の時間を環境教育として進めるための学問的基礎づけにもなろう。現在の暮らしの在り方や生き方を考えさせる身近な地域の教材として利用すれば、環境教育として最も課題とされる「行動化」を促す教材として有効であろう（③の視点にたつて）。

「昔はよかった」という懐古趣味ではなく、次の時代を創造するルネサンス的な作業と、私たちはとらえている。この研究を通して、「自然と人間のかかわり方」についての多くのヒントを発掘できるものとする。環境教育が、実際の「まち作り」とつながっていくためには、このような基礎的な研究が今こそ求められていると考える。幸い、明日香という地は、1000年を越える歴史のあ

る地域であり、考古学や歴史学の資料も多く残されている。長い間に自然と人間が作り出した景観が今も現存している。ひとまず、「自然と人間がどう関わってきたのか。」「自然と人間のつながりが、どのような社会的要因で、どのように変質して来たのか。」きちんとした事実を探り、分析していこうと考えた。私は、奈良という風土を生かし、歴史や民俗を通じた環境教育を模索しているのである。

1998年5月、明日香の地で第9回日本環境教育学会大会のプレイベントとして、「明日香から21世紀を展望する」というテーマでフィールドワークショップを企画実施した（全国から及び地元明日香村稲淵の人を含め、参加者約100名）。前半は、明日香村稲淵の風景から学ぶフィールドワークショップ、後半は、明日香村稲淵の人に学ぶワークショップを行った。明日香のおじいちゃん、おばちゃんのお知恵に学ぶ環境教育が確かにあることを私たちは実感することができた。その記録を「明日香から21世紀を展望する」として、1999年5月にまとめた（残部少数）。この作業を通して、これからの研究課題や研究方向が見えてきた。

2. 今年度の取り組み

- ①これまでの3年間、自然文化誌の方向や方法を探るために、幾人かの話題提供を元に、自然文化誌についての学習会を実施してきた（毎月1回程度）。そのまとめを行った。
- ②明日香村稲淵の棚田における無農薬田の動植物の基礎調査を行った。
- ③飛鳥川の水生動物の基礎調査を行った。

以上をまとめ、2000年6月中には、冊子として刊行する予定である。

3. おわりに

同じ事実・現象を生物学の立場、民俗学の立場など…、立場や視点を変えてみると、新しいものが見えてくる。種々な学問をクロスさせることの重要性をますます感じている。次年度は、自然と人間がつながる接点として農具に焦点をあてた取り組みなどを考えている。